

人・農業・地域をつなぐ『アグリソリューションプラットフォーム』

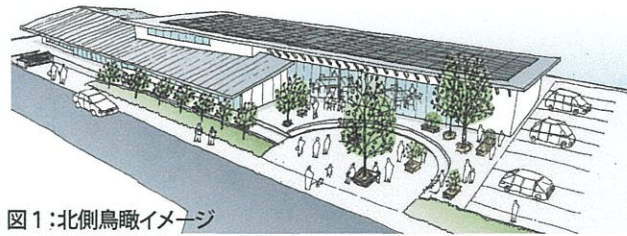


図1:北側鳥瞰イメージ

(1)周辺地域と共生する施設の在り方に関する提案

⑪ まちに開かれ、広場で迎えるシンプルな配置

「執務・研修棟」と「検査棟」を敷地形状に合わせて重ねる配置とし、「T字路の正面」に「広場」を計画します。2つの棟の屈折点となる「共通ホール」は「検査棟」の核として縁側土間と一体的設えとしフレキシブルな室内交流の場となります。「広場」は地域や施設の重心としてあらゆる動線が交わり、地域や周辺住民に積極的に開かれたインターフェースとして機能することで、有機的なプラットフォームの場となります。敷地東西に通抜け可能な散策路を設置し、ベンチなど日常的なサークルプレイスとしての利用から様々なイベントまで活用できる計画とします。施設と広場の一体的な利用とともに、可能な限り現状の造成基盤を活かした整備費と環境負荷を低減する計画とします。

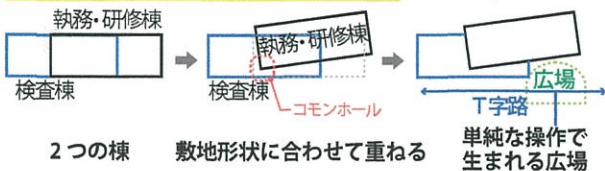


図3:施設構成の考え方

⑫ 施設の顔となる「共通サークル広場」

直売会やイベント利用可能な「共通サークル広場」を配置します。高低差のある2つの広場がステップ状に繋がる事で、まちに開かれた利用から研修会議室との一体的利用まで多様な利用を可能とします。

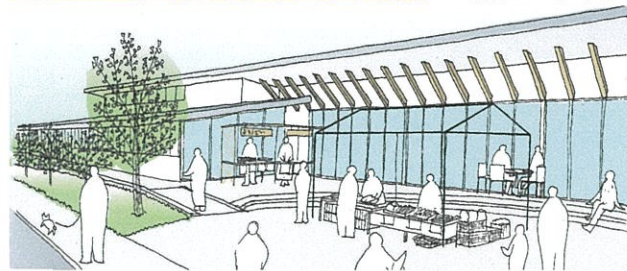


図6:共通サークル広場イメージ

(2)次世代の農業普及所としての施設機能の実効性確保に関する提案

⑬ フレキシブルな「研修・会議・相談エリア」

研修会議室は可動間仕切での3分割にて、各々20人程度の収容及び、相談室と一体化し、最大80人程度の収容が可能です。相談室は6人の個室利用や2室一体化にて15人程度の小会議利用も可能で、各種制度資金の借受や経営相談等プライバシーを要する利用に配慮し、遮音性や静謐性を確保します。

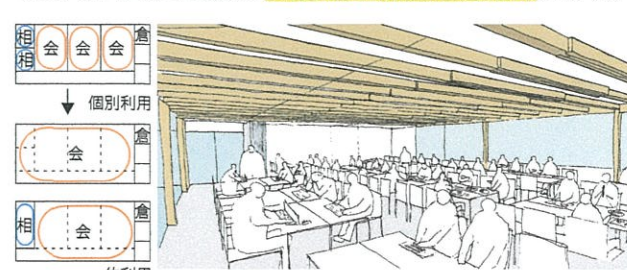


図10:研修・会議・相談エリアイメージ

福島県協働農業普及事業の3つの実施方針「ひとづくり」「ものづくり」「地域づくり」において、普及指導員のスペシャリスト機能やコーディネーター機能を十分に発揮した課題解決(=ソリューション)や、それを支える基盤づくり(=プラットフォーム)が重要であると考えます。私たちは広場を核とする人・農業・地域の様々な接点(=インターフェース)を配置し、多岐に渡る課題解決や支援・指導を実現し、誰もが気軽に立ち寄れる「アグリソリューションプラットフォーム」としての農業普及所を提案します。

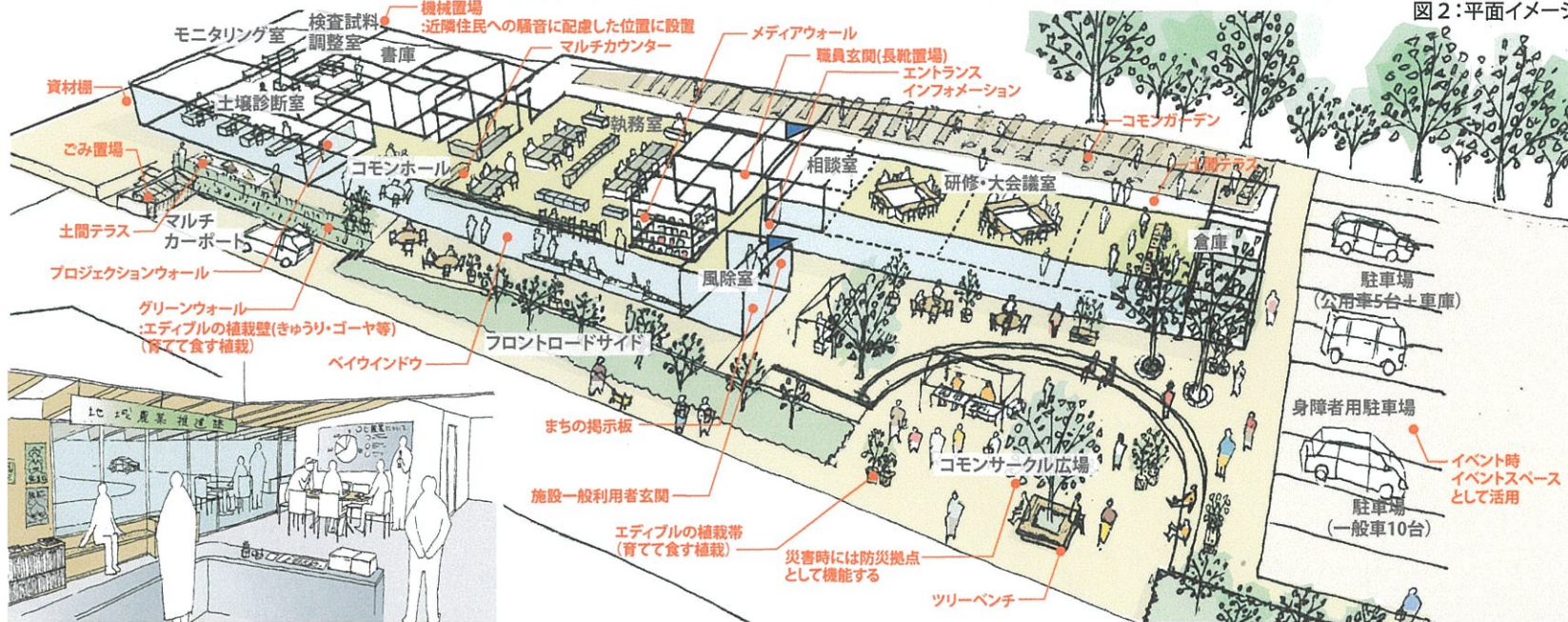


図4:2つの棟の屈折点に計画される共通ホール

⑭ 便利な「マルチカーポート」

土壌採取した公用車の車寄せやゴミ集積車の駐車スペースとして利用可能な「マルチカーポート」を配置し、歩行者等の安全性を確保しながら、職員の業務や公的サービスの利便性の向上に配慮します。ゴミ置場の位置は景観に配慮し計画しています。

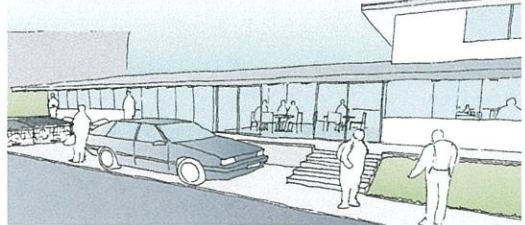


図7:マルチカーポートイメージ

⑮ 情報発信と交流の場となる「アグリメディアラウンジ」

メディアウォール、ベイウインドウ、プロジェクションウォール等、人・農業・地域との多様な接点を生む仕掛け(インターフェース)を各所に散りばめ、農業の発信や発見、情報共有による課題解決の場を提供します。

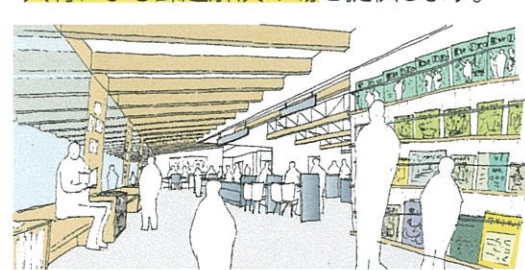


図11:アグリメディアラウンジイメージ

⑯ 安全・安心を生む「フロントロードサイド」

北側道路に面してフロントロードサイドを確保し、緑のマウンドによる住宅地への圧迫感軽減、歩行者の安全、ゴミ集積スペース、まちの掲示板・グリーンウォールの設置など、地域に安全・安心を生み、無機質で危険な擁壁からゆとりと潤いある沿道とします。朝の通学生が多く見受けられる周辺地域の現状を踏まえた提案としています。



図8:フロントロードサイド・グリーンウォールのイメージ

⑰ 多様なニーズに応える「執務エリア」

平行弦トラスによる無柱空間とし、執務レイアウトや職員数の変化に柔軟に対応します。マルチカウンターにより、ハイ&ローカウンターやブース型利用、車いす利用者へのユニバーサル対応等、多様なニーズに合わせた来客対応を可能とします。



図12:執務エリアイメージ

⑱ 関心と発信の「共通ガーデン・散策路」

共通ガーデンは研修会議室に隣接して配置し、農業の実演や説明会時の実習に利用可能とします。敷地内の植栽は「エディブル(育てて食す植栽)」をテーマに計画、散策路や広場には地域の果樹などを植栽し、農業に対する関心と広報、発信の場として利用します。

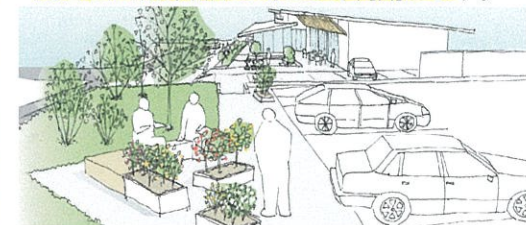


図9:散策路沿いの植栽

⑲ 連携重視の「土壌診断エリア」

土壌診断、放射能検査、モニタリング、書庫の各室をまとめて配置し、動線の短縮化と連携に配慮します。また、土壌診断室は北側マルチカーポートに面して採取した土壌搬入の利便性を図り、安定した採光と通風が確保できる土間テラスを配置します。

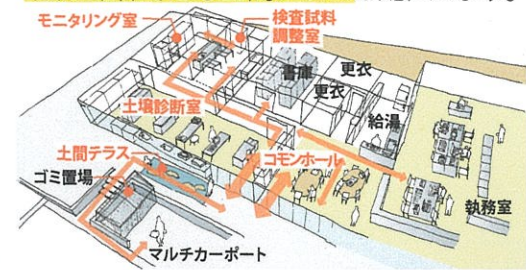


図13:土壌診断エリアイメージ

(3)その他本施設の計画において特に重要と考える提案

⑳ 確実な材料調達と資材高騰リスクの最小化

世界情勢の変化やウッドショックによる資材調達困難リスクと価格高騰の影響を最小化する為、先行伐採による材料調達及び、各種資材高騰への対応策を予め検討します。

図14:先行伐採による材料調達工程案

㉑ 価格高騰への対応

計画 共用部のコンパクト化、機能の有機的な連携により面積縮小を検討する
構造 樹種を限定しない設計とする。耐力壁や水平構面は在庫不足が続く構造用合板の代わりとして角材と金物を併用したプレース構造を検討する。
積算 運搬費は重機搬入などまとめてできる工種を整理し、燃料コストを省力化する
施工 木製合板型枠ではなく鋼製型枠で施工可能な基礎形式を検討する
外構 既存の擁壁を可能な限り利用しながら造成を計画する

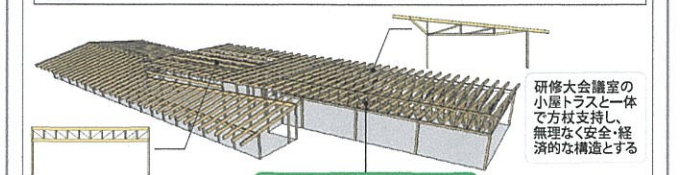


図15:調達困難な資材・価格高騰への対応策

㉒ 調達困難な資材

設備 半導体の品薄状態にある現状を踏まえ、発注時期を設計段階から確認し施工時にスムーズな発注が可能な様に設計を進める
※インシャルコスト・ランニングコストを比較検討しながら、資材耐用年数の高い資材を選定し、製造中止品などのメンテナンス性に配慮して設計する

図15:調達困難な資材・価格高騰への対応策

㉓ NearlyZEB実現への設計方針と共有

必要条件をリスト化し、設計段階での共有を図ります。

図16:NearlyZEB実現のための検討項目

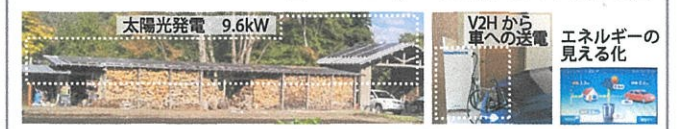


写真1・2・3:太陽光発電とV2H連携/BEMS_住宅導入実例

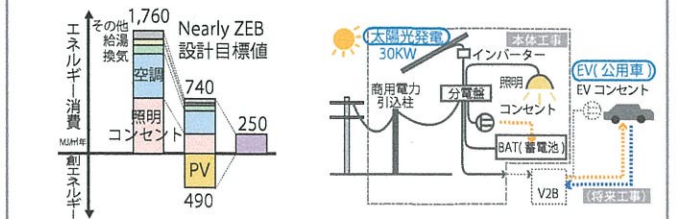


図17:NearlyZEBシミュレーション

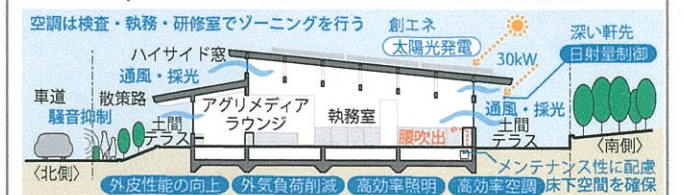


図18:電力連携イメージ

図19:環境断面イメージ